

令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第8号

令和7(2025)年11月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

病害虫の早期発見に努め、適切に防除しましょう！

予想期間 11月下旬～12月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**少ない**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(ほ場率：**平年比 25.8%**、株率：**平年比 88.9%**)。(-)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は平年並か高い(±～+)、降水量は少ない(-)、日照時間は多い(-)。
・ 保温開始後は気温と湿度が本病の発病に適した状態となり、例年11月から12月にかけて発生が増える傾向があるため、適正な温度管理やかん水管理を徹底し、発病を防ぐ。
・ 予防を主体とし、発病前からシグナムWDG(RACコード F:11、7)等を葉裏まで十分に薬剤が付着するように散布する。
・ 曇雨天時にはくん煙剤の使用が有効だが、硫黄くん煙剤は天敵に悪影響を及ぼす可能性があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(ほ場率：**平年比 52.8%**、株率：**平年比 50.0%**)。(-)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は平年並か高い(±～+)、降水量は少ない(+)、日照時間は多い(+)
・ 雑草はアザミウマ類の増殖源となるため、施設内外の除草を行う。
・ 花をよく観察し、その1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、ディアナSC(I:5)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：**平年比 99.5%**、株率：**平年比 121.1%**)。(±)
- (3) 対 策 ・ 向こう1か月の気温は平年並か高い(±～+)、降水量は少ない(+)、日照時間は多い(+)
・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の密度を下げておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト 黄化葉巻病(TYLCV)

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い(ほ場率：**平年比 126.1%**、株率：**平年比 400%**)。(+)
・ 現在のコナジラミ類の発生量は平年並(±)。
・ 向こう1か月の気温は平年並か高い(±～+)、降水量は少ない(+)
- (3) 対 策 ・ 施設内外の除草を徹底する。
・ コナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入口・側窓・天窗)には0.4mm目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入口は二重にする。
・ 黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の早期発見に努める。
・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋等で密封し枯死させてから処分する。
・ 耐病性品種であっても、感染した場合は伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
・ コナジラミ類は低密度でもウイルスを媒介するため、発生初期から登録のある薬剤で防除

する。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。特にタバココナジラミに対しては有効薬剤に限られるため、薬剤感受性検定結果等を参考にする。

- (4) 備考
- ・ 県内ではトマト黄化病の発生が確認されている。トマト黄化葉巻病はタバココナジラミが媒介し、トマト黄化病はタバココナジラミとオンシツコナジラミの両種が媒介する。
 - ・ [防除のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 にら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 715%、株率：平年比 200%）。（+）
 - ・ 向こう 1 か月の気温は平年並か高い（±～+）、降水量は少ない（-）、日照時間は多い（-）。
- (3) 対策
- ・ 施設内が多湿になると発病しやすいため、日中の気温が高い時間帯に換気を行い、湿度を下げる。
 - ・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
 - ・ 予防を主体とし、発病前からセイビアーフロアブル 20 (F:12) 等を散布する。

6 野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・ 11 月第 3 半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並（±）。
 - ・ 現在の発生量は、いちごでは多い（ほ場率：平年比 181.4%、株率：平年比 200%）。（+）
 - ・ 向こう 1 か月の気温は平年並か高い（±～+）、降水量は少ない（+）、日照時間は多い（+）。
- (3) 対策
- ・ 定期的にはほ場を観察し、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉ごと摘み取り、施設外で適切に処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が低下するため、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
 - ・ 野外からの侵入が減少する時期であるが、施設内での防除を徹底し、幼虫が残存しないようにする。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや少	平年並	きゅうり	べと病	平年並	やや少
トマト	灰色かび病	少	少	きゅうり	コナジラミ類	やや多	多
トマト	すすかび病	平年並	やや少	にら	アザミウマ類	やや少	平年並
トマト	コナジラミ類	やや少	平年並	きく	ハダニ類	やや少	平年並

季節の病害虫防除対策

○ 水稲 越冬害虫

- ・ 再生稲（ひこばえ）やスズメノテッポウ等のイネ科雑草は、縞葉枯病（媒介虫：ヒメトビウンカ）や黄萎病（媒介虫：ツマグロヨコバイ）の媒介虫の増殖源及び病原の獲得源になるため、丁寧な耕起を行いましょう。

○ トマト等 トマトキバガ

- ・ トマトキバガの幼虫は茎葉内部に潜入し、食害しながら孔道を形成します。葉では、食害部の表面のみが残り、薄皮状となって白色～褐色に変色するのが特徴です。果実では、幼虫がせん孔して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が生じ、腐敗の原因となります。被害の拡大を防ぐためには、ほ場をこまめに観察し、疑わしい虫や被害を発見した際には、速やかに適切な薬剤で防除を行うことが重要です。

- ・ [令和 7 \(2025\) 年度植物防疫ニュース No. 3](#)を HP に掲載中です。

○ かんしょ サツマイモ基腐病

- ・ 本病は本県での発生は確認されていませんが、令和 7 (2025) 年 11 月 20 日現在、全国 36 都道府県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。健全な種苗を導入するとともに、早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。

- ・ [サツマイモ基腐病に注意!](#)を HP に掲載中です。

○ 果樹類

- ・ 整枝・せん定作業では、罹病枝の除去や被害部の削り取りを徹底しましょう。処理後の切り口にはゆ合剤を塗布し、病原菌の侵入を防ぐことが重要です。また、落葉は多くの病害の伝染源となるため、放置せず適切に処分しましょう。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）等に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間11月22日から12月21日 11月20日 気象庁発表）

寒気の影響を受けにくいいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

移動性高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	40	40
降水量	50	40	10
日照時間	10	30	60

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)でもご覧になれます。



～栃木県からのお知らせです～

11月～1月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！



防除日誌等から作業内容を振り返り、来年のより良い防除につなげましょう！

予想期間 12月下旬～1月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い(ほ場率：**平年比164%**) (+)。
・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多く(+)、日照時間は少ない(+)**見込み**。
- (3) 対 策 ・株が**脆弱徒長**すると発生しやすくなるため、**適正な温度管理**やかん水を行う。
・**予防**を主体とし、発病前から**シオウチノスケフロアブル**(RACコード F:U13・9)等を葉裏まで十分に薬剤が付着するように散布する。
・曇雨天時には**くん煙剤**の使用が有効だが、**硫黄くん煙剤**は天敵に悪影響を及ぼす可能性があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。
・**紫外線(UV-B)**の照射は、本病の発生抑制に効果的である。

2 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(ほ場率：**平年比0%**) (-)。
・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多く(+)、日照時間は少ない(+)**見込み**。
- (3) 対 策 ・**多湿条件**において発生しやすいので、**下葉を除去**し株元の風通しをよくするとともに、**かん水過多**にならないように注意する。
・発病した果実や果梗等は**伝染源**となるので、**速やかに取り除き**、施設外で処分する。
・**予防**を主体に、**セイビアーフロアブル20(F:12)**等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並(ほ場率：**平年比100%**、株率：**平年比101%**) (±)。
・向こう1か月の気温は高く(+)、日照時間は少ない(-)**見込み**。
- (3) 対 策 ・ほ場をこまめに観察し、**増殖する前に防除**を行う。
・**化学農薬**に対する感受性低下が起りやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布するとともに、**抵抗性**が発達しにくい**気門封鎖剤**や**天敵製剤**を活用する。
・天敵導入時にハダニ類が多いと**失敗**しやすいため、天敵導入前に**気門封鎖剤**や**天敵**に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の密度を下げておく。
- (4) 備 考 ・[ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない(ほ場率：**平年比43%**、株率：**平年比33%**) (±)。
・向こう1か月の気温は高く(+)、日照時間は少ない(-)**見込み**。
- (3) 対 策 ・花を良く観察して、アザミウマ類が見られた場合には、**マッチ乳剤(I:15)**を散布する。花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、**スピノエース顆粒水和剤(I:5)**等を散布する。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：**やや少ない**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない(ほ場率：**平年比0%**) (-)。
・向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多く(+)、日照時間は少ない(+)**見込み**。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように**換気**やかん水に注意する。また、**循環扇**や**暖房機**等を用いた通風により、**結露防止**に努める。
・発病した果実や葉等は**伝染源**となるので、**速やかに取り除き**、施設外で処分する。
・**予防**を主体に、**フルピカフロアブル(F:9)**等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・[灰色かび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

6 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 198%）。（+）
・向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量は多く（+）、日照時間は少ない（+）見込み。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・トリフミン水和剤(F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
- (4) 備 考 ・[すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比 132%）。（+）
・向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量は多く（+）、日照時間は少ない（+）見込み。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
・草勢低下は発生を助長させるため、適正な肥培管理を行う。
・予防を主体にランマンフロアブル(F:21)等を散布する。
- (4) 備 考 ・[べと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

8 トマト・きゅうり等果菜類 コナジラミ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・現在のコナジラミ類の発生量はトマトでやや多い（ほ場率：平年比 161%）、きゅうりでもやや多い（ほ場率：平年比 238%）（+）。
・向こう 1 か月の気温は高く（+）、日照時間は少ない（-）見込み。
- (3) 対 策 ・コナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入口、側窓、天窗）に 0.4mm 目合以下のネットを張り、特に出入口は二重にする。
・黄色粘着板を設置して早期発見に努める。
・低密度でもウイルスを媒介して被害が大きくなりやすいため、発生初期から登録のある薬剤で防除する。特にタバココナジラミに対しては有効薬剤に限られるため、薬剤感受性検定結果等を参考に参考にする。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・コナジラミ類によるウイルスの伝播を防ぐため、発病株は速やかに抜き取り、土中への埋設や、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・トマト黄化葉巻病の耐病性品種を作付けした場合でも、感染株は伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備 考 ・[防除のポイントNo22、タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

9 なら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・現在の発生量はやや少ない（ほ場率：平年比 103%、株率：平年比 11%）（-）。
・向こう 1 か月の気温は高く（+）、降水量は多く（+）、日照時間は少ない（+）見込み。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿になると発病しやすいため、日中の気温が高い時間帯に換気を行い、湿度を下げる。
・捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
・予防を主体とし、発病前からアフエットフロアブル (F:7) 等を散布する。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	平年並	なら	アザミウマ類	やや多	やや多
トマト	うどんこ病	やや多	多い	きく	ハダニ類	平年並	平年並
きゅうり	うどんこ病	やや多	多い				

季節の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカの状況（11月）と対策

- ・イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカの越冬世代成虫の保毒虫率は県平均で4.4%と平年並、水田畦畔等における生息密度は県平均で13.6頭と平年並でした。一方、一部の地域において、保毒虫率が要防除水準の10%を超える地点が認められています。次作においても、箱施用剤の施用等、イネ縞葉枯病対策を徹底しましょう。

○トマト等 トマトキバガ

- ・トマトキバガの幼虫は植物組織内に潜入して食害し、葉では食害部の表面のみが残り、薄皮状となって白色～褐色に変色します。なお、ハモグリバエ類による食害は、片面のみが線的に変色するため裏面からは確認できませんが、本虫による食害は、葉の両面が面的に変色することで区別できます。また、果実では幼虫が内部に潜入して食害するため、表面に小さな穴ができ、腐敗の原因となります。被害の拡大を防ぐため、ほ場をよく観察し、早期発見に努めましょう。また、疑わしい虫や被害を発見した場合には、薬剤防除を行いましょう。
- ・本虫及びその被害の写真、薬剤等は、当センターHPに掲載中の[令和7（2025）年度植物防疫ニュース No. 3](#)で御確認ください。

○果樹類病害の冬期防除

- ・整枝・せん定作業では、罹病枝の除去や被害部の削り取りを徹底しましょう。処理後の切り口にはゆ合剤を塗布し、病原菌の侵入を防ぐことが重要です。また、落葉は多くの病害の伝染源となるため、放置せず適切に処分しましょう。

農薬の安全使用等

- 「**栃木県農薬危害防止運動**」実施中（令和7年11月から令和8年1月）です。農薬は適正に管理しましょう。また、農薬を使用する際には、容器のラベルに記載された内容を遵守し、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

○薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

○薬剤で防除する際には、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間12月20日から1月19日 12月18日 気象庁発表）

- ・寒気の影響を受けにくいいため、向こう1か月の気温は、高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
- ・低気圧の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は、多いでしょう。また、向こう1か月の日照時間は、少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10	20	70
降水量	10	40	50
日照時間	50	30	20

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧いただけます。



～栃木県からのお知らせです～

11月～翌1月は、「**栃木県農薬危害防止運動**」の実施期間です。

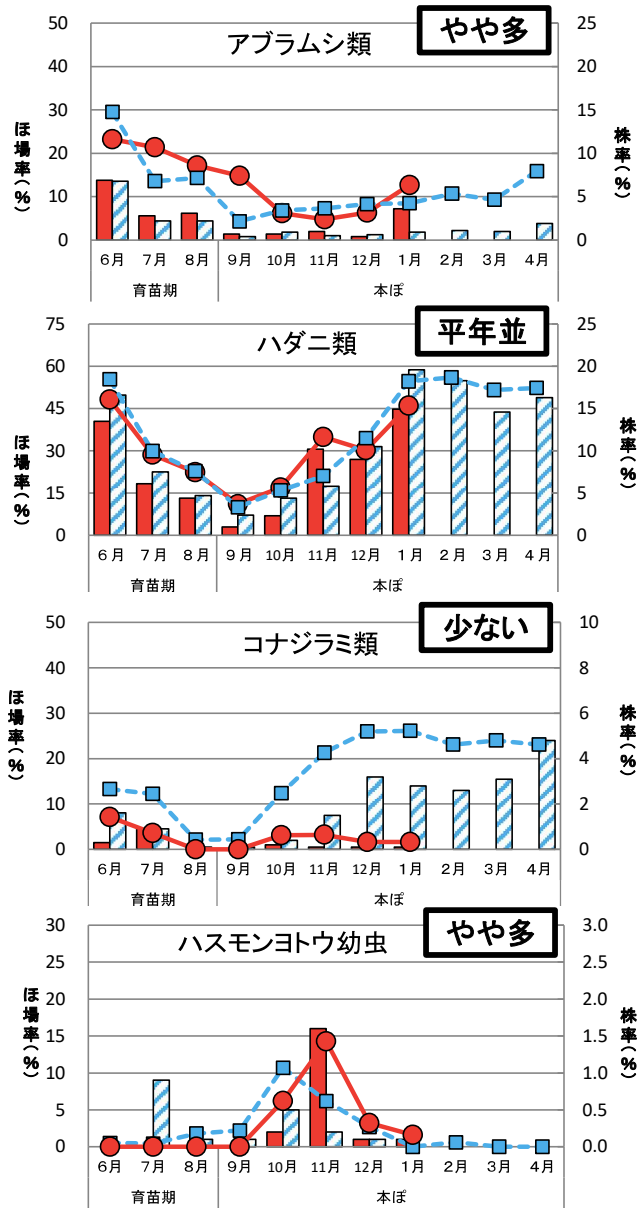
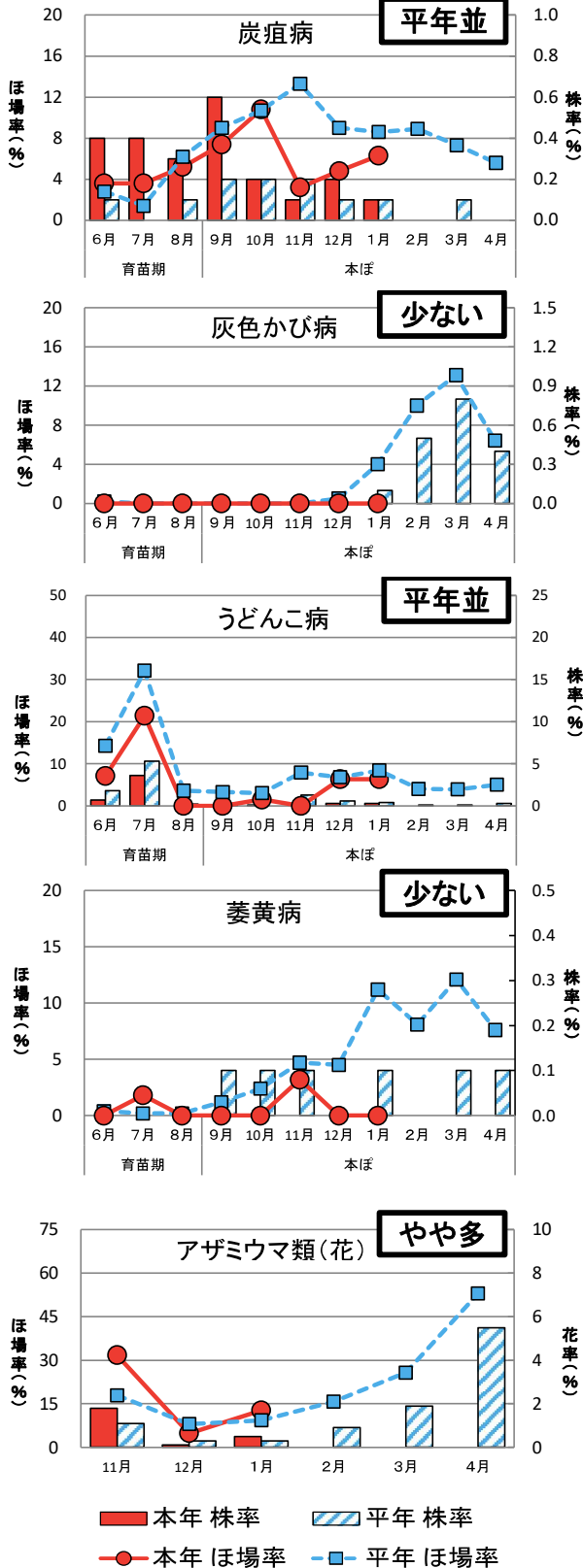


- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！

いちご病害虫情報第8号 (1月)

令和7(2025)年1月24日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数 63 か所】



※ほ場あたり25株調査
 ※株率(%) : 発生株数 / 調査ほ場数 × 25株
 ※ほ場率(%) : 発生が確認されたほ場数 / 調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アザミウマ類の対策 ー

秋に発生が認められたハウスでは、2月頃からの被害増加に注意しましょう。

- 1 ハウス内で越冬したアザミウマ類は、1～2月頃から増殖しはじめる。春先の被害を抑えるため、秋に発生が認められたハウスでは、マッチ乳剤(RACコード I:15)等で適切に防除する。
- 2 3月以降は短期間で急増するため、こまめに花や果実を観察する。

■ 今月のトピックス アブラムシ類

被害症状について

イチゴはアブラムシ類に寄生されると葉が萎縮し、草勢が低下します。本ぽの保温開始期以降には、甘露の排出によるすす症でがくや果実が汚れ、商品価値が著しく低下してしまいます。

県内のイチゴに寄生するアブラムシ類は数種知られてますが、その主体はワタアブラムシです。ワタアブラムシは雑草等からほ場内に侵入し増殖します。本虫はイチゴの未展開葉の隙間、がく、果実、ランナー先端部等、あらゆる部位に寄生・加害します。特に、未展開葉の隙間での増殖を見逃しやすいため、管理作業中によく確認しましょう。発生が多くなると、被害株上、もしくはその周辺のマルチに甘露や白い脱皮殻が見られます。



ワタアブラムシ無翅虫



株元のすす症



がくのすす症

防除対策について

- 被害株周辺のマルチにアブラムシ類の分泌する甘露や白い脱皮殻が見られたらアブラムシ類が発生していると判断しましょう。脱皮殻は葉裏にも見られます。
- 薬剤散布は、かけムラのないように行いましょう。特に気門封鎖剤は、アブラムシ類に直接かからないと効果が無いので注意しましょう。
- ORAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 天敵を利用するときは、アブラムシ類の発生状況を見ながら適時に放飼し、天敵に影響の少ない農薬を散布しましょう。
- 施設は開口部を防虫ネットで覆い侵入を防ぎましょう。
- 施設内外の雑草は増殖源となるので除草しましょう。

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課

(Tel 028-665-1244) までお問合せください。

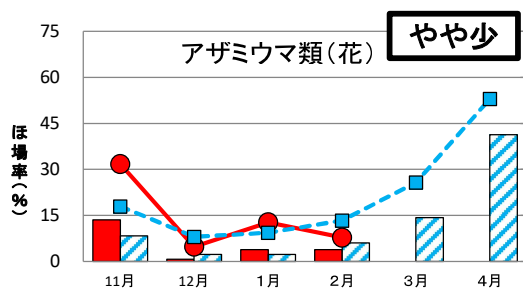
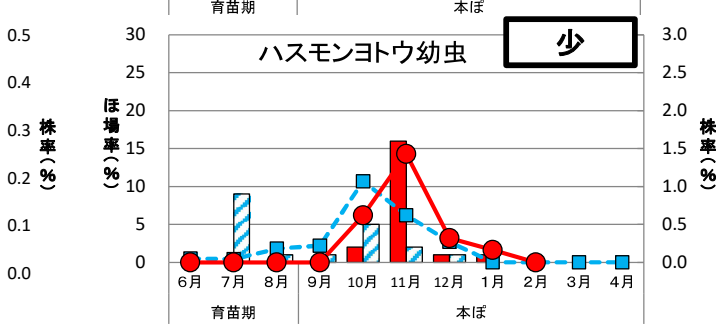
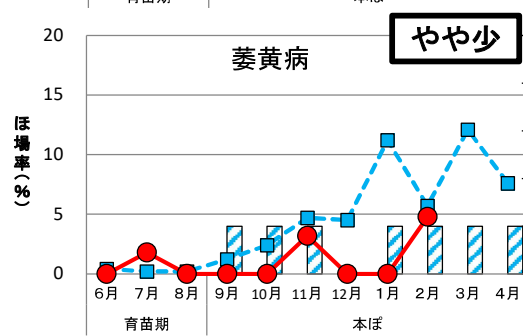
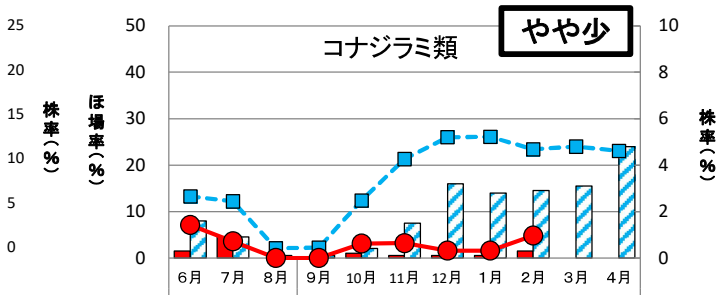
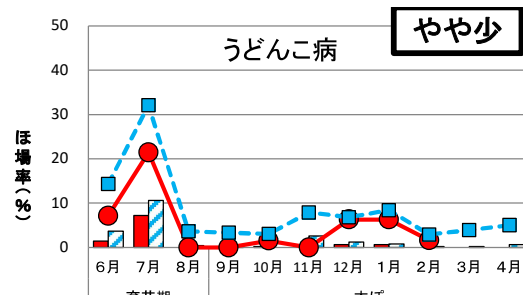
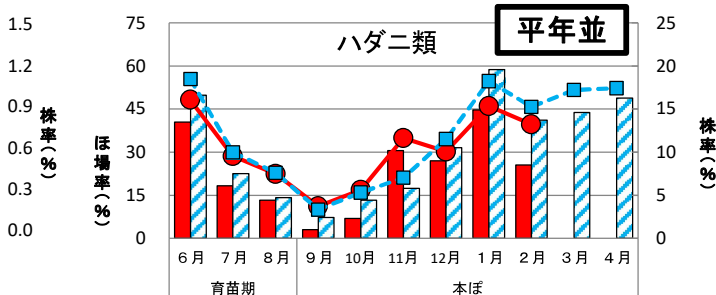
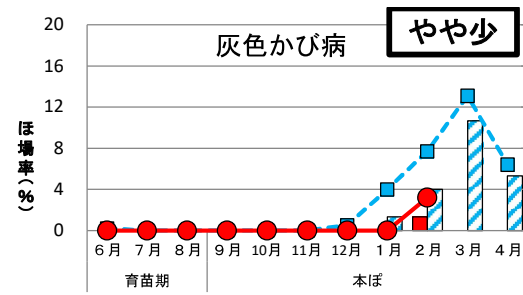
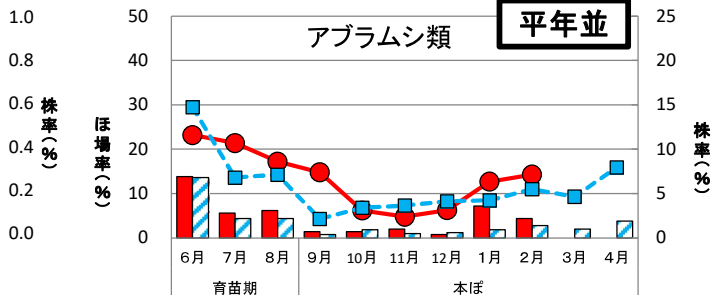
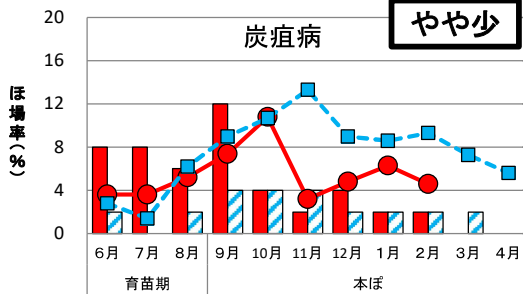
病虫害情報発表のお知らせはX (旧ツイッター)「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



いちご病害虫情報第9号 (2月)

令和7(2025)年2月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数 63 か所】



■ 本年 株率 ■ 平年 株率
● 本年 ほ場率 ● 平年 ほ場率

※ほ場あたり25株調査
※株率(%):発生株数/調査ほ場数×25株
※ほ場率(%):発生が確認されたほ場数/調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

— アブラムシ類の対策 —

気温の上昇に伴いアブラムシ類の発生・被害が目立ち始めるので注意しましょう。

- 1 春先になり、茎葉が繁茂すると、アブラムシ類の発生に気づきにくくなります。葉やマルチ上に落下する脱皮柄や甘露の痕跡を目安に、早期発見に努めましょう。
- 2 茎葉が繁茂すると、株元に寄生するアブラムシ類には薬液がかかりにくくなります。薬剤散布時には、丁寧な散布に努めましょう。

■ 今月のトピックス 萎黄病

被害症状について

萎黄病に感染すると、葉の奇形（写真1）、株の萎縮や黄化（写真2）、クラウン内部の導管の褐変（写真3）、根部の褐変腐敗（写真4）等の症状が現れる。また、高温期には、急激な萎凋から株枯れを起こすことがある（写真5）。

感染経路は、土中に残った胞子が根から侵入して感染することで発病する。また、感染親株からランナーを通じて子苗にも感染する。

土壌温度が25℃～30℃になると多発しやすくなるため、高温期の発生が目立ち、乾燥などで根が傷みやすい環境下で発生が助長される。病原菌は自然土壌中で4～5年以上以上生存できるため、土壌が汚染されている場合、土壌消毒等を行わないと次作も発生する。



写真1 小葉の奇形



写真2 株の萎縮、黄化

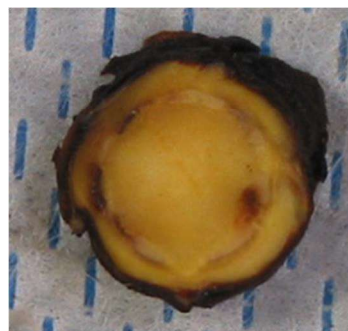


写真3 被害株のクラウン断面



写真4 根の褐変腐敗



写真5 急性萎凋症状

防除対策について

病原菌を親株床や本ぼに持ち込まないため、予防を主体に防除対策を実施する。

- 1 培土や資材は、病原菌に汚染されていない消毒済みのものを使用する。
- 2 親株管理・育苗時に発病が疑われる株は早急に除去し、ほ場外に持ち出す。
- 3 発病株は抜き取り肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理後に処分する。
- 4 本病が発生したほ場では、栽培終了後に土壌消毒を行う。

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課

(Tel 028-665-1244) までお問合せください。

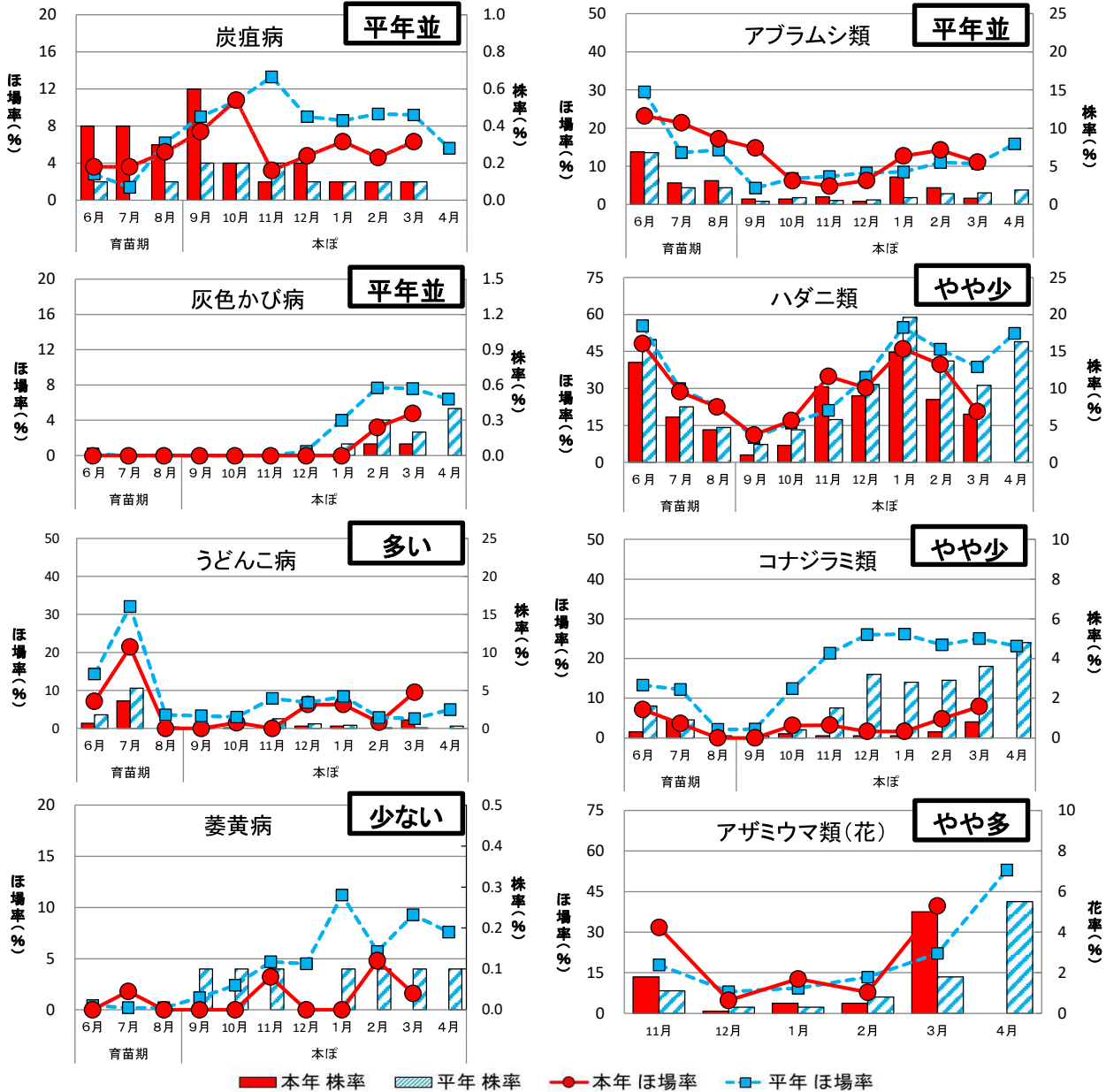
病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



いちご病害虫情報第10号（3月）

令和7（2025）年3月14日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アザミウマ類の対策 ー

アザミウマ類が平年よりやや多く発生していました。
気温の上昇により、増加しやすい時期であるため、下記の対策を徹底しましょう。

- 1 施設内外の雑草は発生源・増殖源となるため除草を徹底する。
- 2 ほ場をこまめに確認し、早期発見、早期防除に努める。
- 3 着色前の未成熟果を観察し、表面がサビ色になる幼虫の食害を認めたら、マッチ乳剤(1:15)等を散布して次世代の発生を防止する。
- 4 1割以上の花で成虫が確認された場合(要防除水準)には、スピノエース顆粒水和剤(1:5)等を散布して被害の拡大を防ぐ。

－ うどんこ病の対策 －

うどんこ病が平年より多く発生していました。

対策を徹底し、被害を抑制しましょう。

- 1 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適切な温度管理やかん水を行う。
- 2 予防を主体に、ショウチノスケフロアブル(F:9,U13)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- 3 曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

■ 今月のトピックス 次作にむけた防除対策

健全な苗の育成

○健全な苗を育成するため、育苗ハウスに病害虫を持ち込まないようにしましょう。

- 1 親株を定植するための培土や資材等は、病原菌に汚染されていない消毒済みものを使用
- 2 本ぽから育苗ハウスに病害虫を持ち込まないような管理作業の徹底
 - (1) 本ぽの管理作業後に苗の管理作業を行わない、苗と本ぽの管理作業者を別にする等により、人による病害やハダニ類等の伝搬を防止
 - (2) 本ぽにおける病害虫防除の徹底(ほ場内の観察による病害虫の早期発見・早期防除、施設内外の環境整備(排水対策、除草等含む)、施設開口部の防虫ネット等の補修)
 - (3) 本ぽ栽培終了時のハウスの蒸し込みによる害虫の野外への拡散防止
 - (4) 植物残さをハウス外に持ち出して適切に処分(特にクラウン部分がそのまま残らないように処分)
 - (5) 本ぽでの土壌消毒の実施

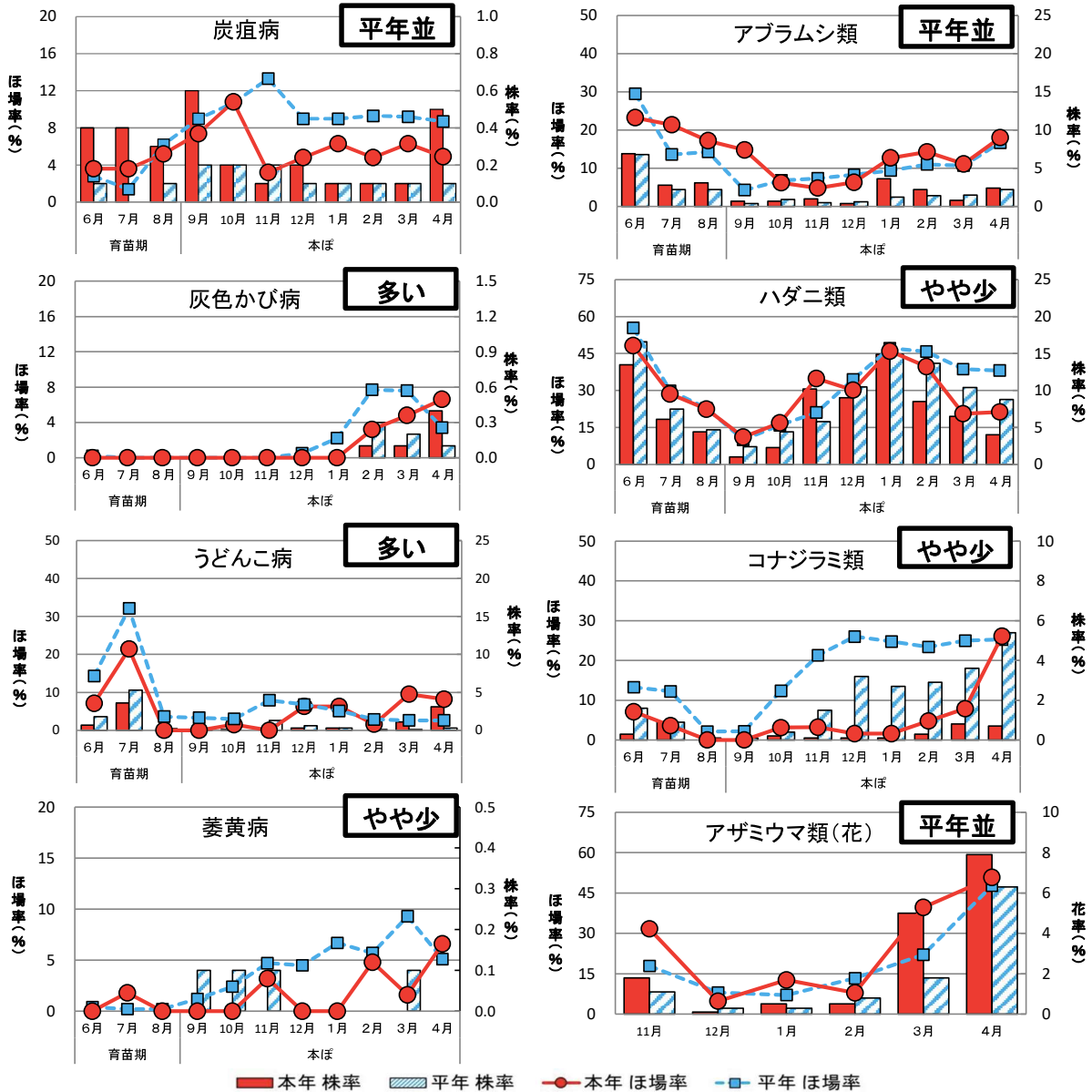
詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課

(Tel 028-665-1244) までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX(旧ツイッター)「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：61か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

一 アザミウマ類の防除 一

アザミウマ類は、作の終盤で最も重要な害虫の一つであり、花に飛来して産卵し、幼虫が幼果の表面を加害してサビ状となる被害果を生じさせます。気温の上昇に伴い、野外での活動が活発化して施設内への侵入が急増したり、施設内での増殖が早まったりするため、被害が発生・増加しやすくなっています。

少しでも長い期間収穫するために、施設内をよく観察し、発生状況に応じた総合的な防除を行いましょう。

- 1 開花した雑草等にも生息するため、施設内外の除草を徹底する。
- 2 いちごの花への寄生状況をこまめに確認し、観察した花の1割以上にアザミウマ類が確認された場合、速やかな薬剤防除を実施する。
- 3 多発時には卵や蛹が残りやすいため、それらがふ化・羽化する時期を狙って追加防除する(1回目の防除からおよそ5日後)。

※ 病害虫防除対策のポイントNo.19イチゴのアザミウマ類、アザミウマ薬剤感受性検定結果①、②を当センターHPに掲載中。

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/bouio/documents/point19.pdf>

<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/bouio/documents/2019-engei-azamiума.pdf>

<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/bouio/documents/2019-engei-azamiума2.pdf>

■ 今月のトピックス 栽培終了後・育苗時の防除対策

栽培終了後

- 1 施設内の蒸し込みを実施し、害虫の野外への拡散を防止する。
- 2 植物残さを施設外に持ち出して適切に処分する(特にクラウン部分がそのまま残らないように処分する)。
- 3 本ぽでの土壤消毒を実施する。

育苗時

- 1 仮植するための培土や資材等は、病原菌に汚染されていない消毒済みのものを使用する。
- 2 防虫ネットの展張によりアブラムシ類等の害虫の侵入を防止する。
- 3 除草を行い、ハダニ類等の増殖源を絶つ。
- 4 適切なかん水を行い、水のはねかえり等による炭疽病、疫病の発生を予防する。
- 5 炭疽病、萎黄病の発病株は早急に抜き取り、肥料袋等に詰め、空気を排出して口をしっかりと閉じた上で日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理後に処分する(写真1)。
- 6 本ぽの管理作業後に苗の管理作業を行わない、苗と本ぽの管理作業者を別にすることにより、本ぽから育苗ハウスに病害虫を持込まないような管理作業を徹底する。



写真1 嫌氣的発酵処理の例

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課 (TEL 028-665-1244) までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



農業総合研究センターHP

いちご病害虫情報第12号(総集編)

＜令和7(2025)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、炭疽病がやや多い～多い発生でしたが、全体的に病害虫が少ない～平年並で推移しました。本ぼにおいては、秋口の高温と少雨により、ハスモンヨトウの発生が多く確認されました。また春先は、平年より気温が高く降水量が多かったことから、灰色かび病とうどんこ病の発生が多くなりました。

1 炭疽病

＜発生状況＞

6～9月はやや多い～多い発生で推移しましたが、10月以降はやや少ない～平年並の発生となりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょ。発生前から予防的な薬剤散布を行うとともに、発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封し、嫌氣的発酵処理をして処分しましょ。

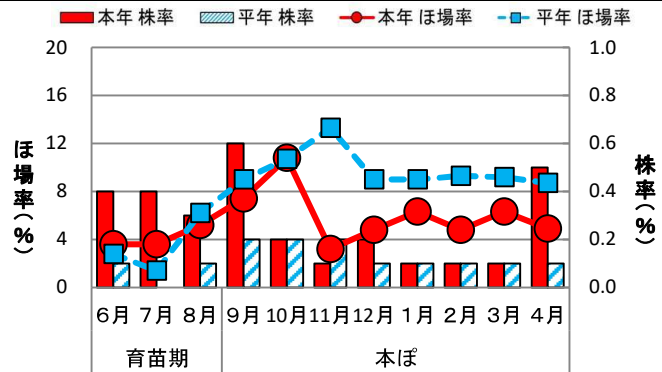


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

全体的に平年より少ない発生でした。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で4～5年以上生存するため、本ぼで発生が確認されたほ場では土壌消毒を適切に行いましょ。

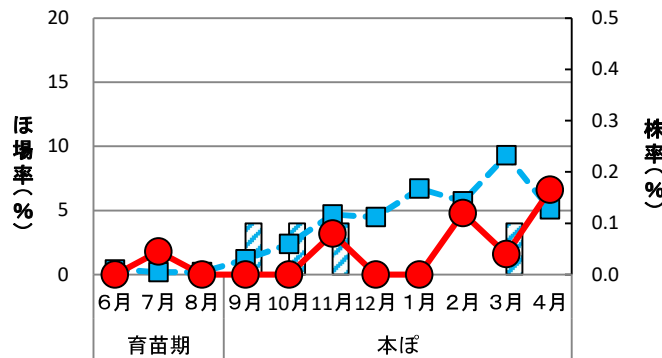


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に少ない～平年並の発生でしたが、4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましょ。

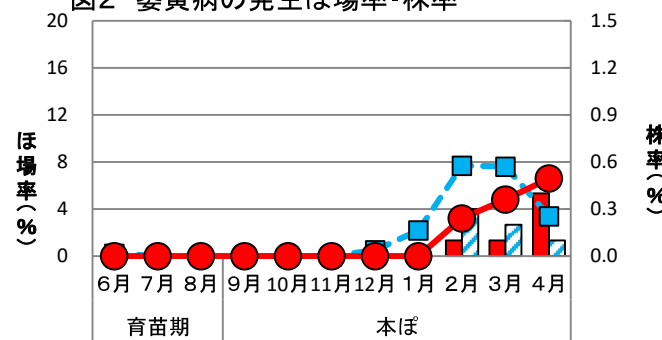


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

全体的に少ない～平年並の発生でしたが、3月以降は発生が多くなりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょ。

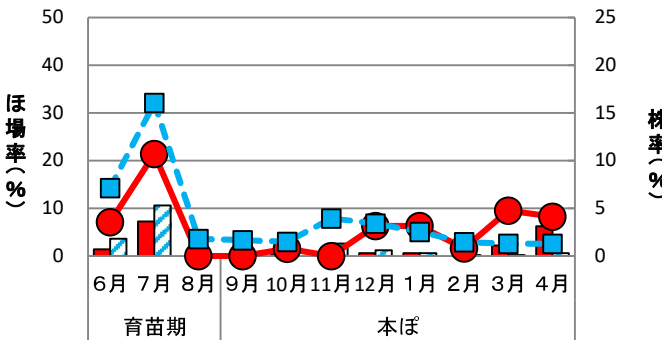


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

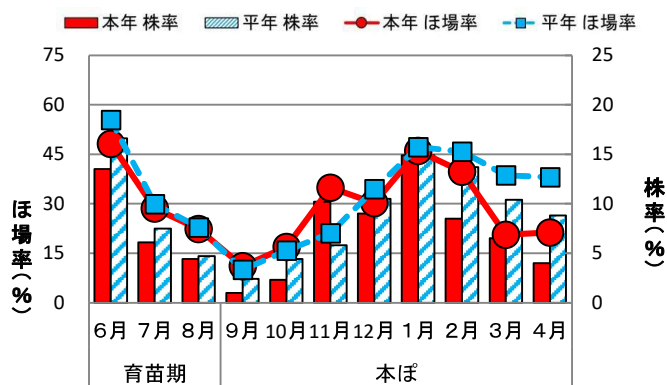


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

<発生状況>

本ぼでは11月に発生が多くなりました。

<防除対策>

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

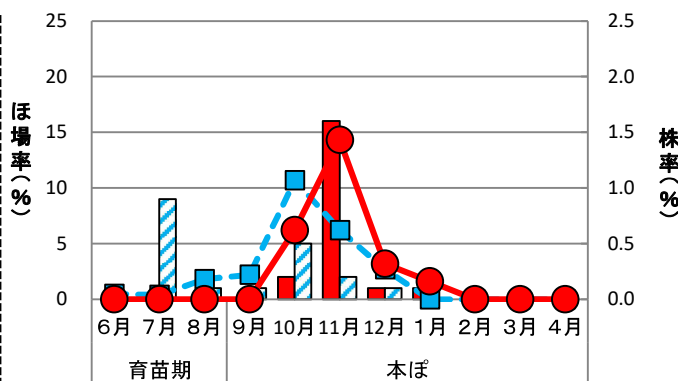


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。全体的に平年並～多い発生で推移しました。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

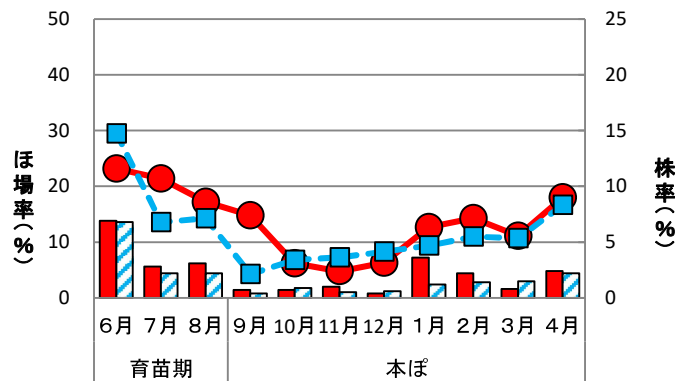


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

<発生状況>

11月から発生が確認され、全体的に平年並～やや多い発生でした。

<防除対策>

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

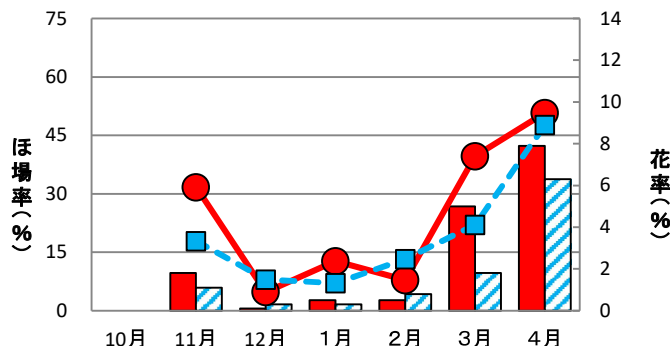


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病害虫防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぽの管理作業が重なる時期です。本ぽで発生している病害虫を親株に持ち込まないように、作業順番に注意しましょう。親株で病害虫の発生を確認したら速やかに防除し、苗や次作の本ぽへの持込みを防止しましょう。

－ 炭疽病 －

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 主に、6月下旬から9月下旬にかけて発生しますが、高温の時期に特に発生しやすくなります。
2. 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょ。
3. 発病株は見つけしだい取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を十分に行った後に処分しましょ。
4. 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行いましょ。

－ ハダニ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 本ぽで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ぽ作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょ。
2. 育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I:1B 収穫75日前まで）やアグリメック（I:6 親株育成期、育苗期）等を効果的に使用しましょ。
3. 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
4. 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぎましょ。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布しましょ。

－ アブラムシ類 －

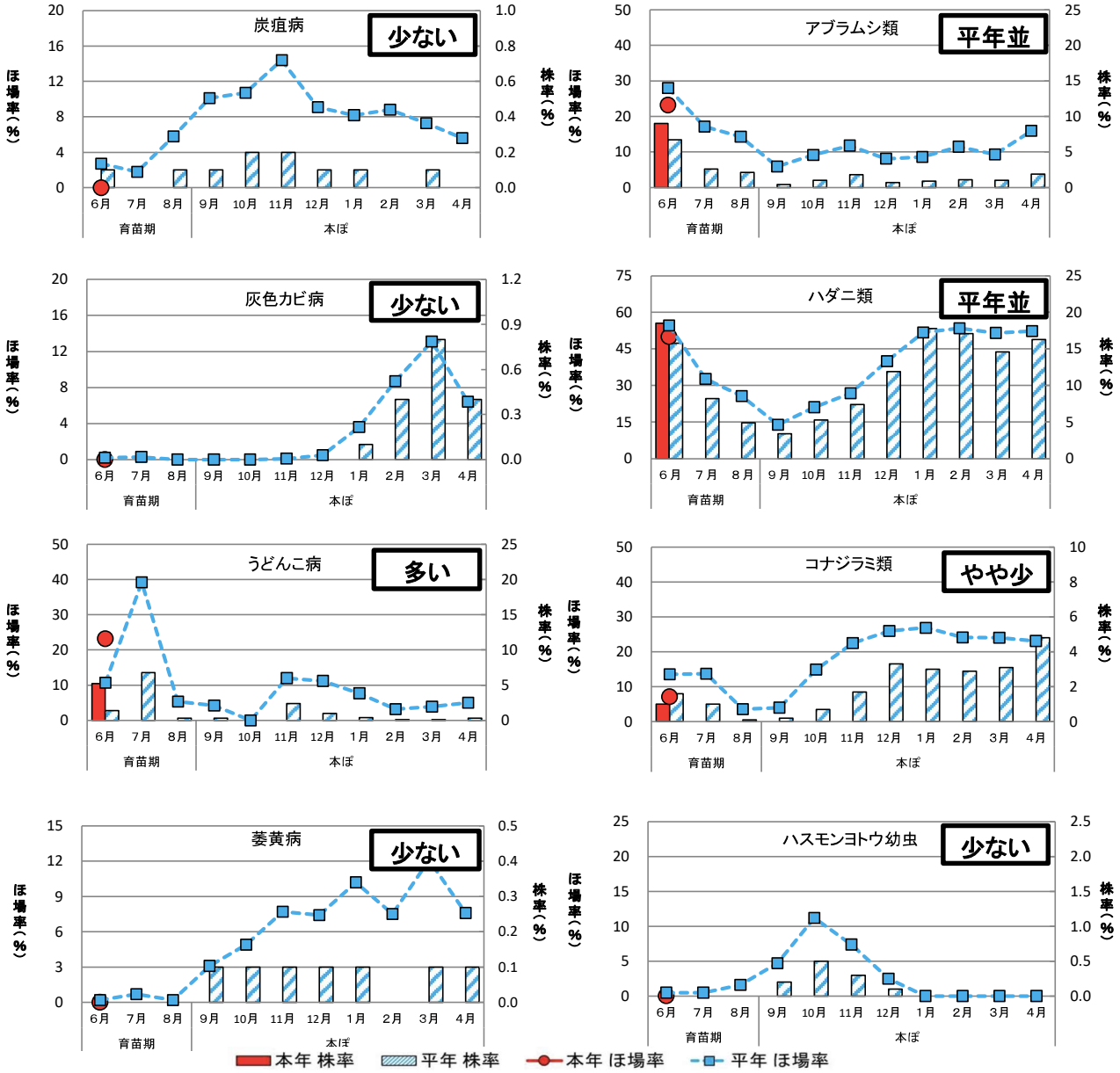
気温が高く、飛び込みが多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
2. 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぎましょ。
3. 発生初期から薬剤を散布しましょ。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょ。

いちご病害虫情報第1号（6月）

令和7（2025）年6月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：56か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

－ 炭疽病 －

高温・多湿条件で発生が拡大しやすい病害のため、高温が予想されている本年は多発のおそれがあります。**発生後の防除が困難なため、予防を主体とした防除対策を徹底しましょう。**

- 1 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から**薬剤※**を定期的に予防散布する。
※ベルコートフロアブル(RACコードF:M7)等。
- 2 分生子の飛散・伝染を防ぐため、できるだけ**水の跳ね返りのない方法※**でかん水を行う。
※頭上かん水は控え、点滴チューブ等。
- 3 罹病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、**嫌氣的発酵処理※**後に処分する。
※罹病株を肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりのよい野外に放置する。

イチゴ炭疽病について、詳細は以下をご覧ください。

<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/boujo/documents/point21.pdf>

■ 今月のトピックス

－ うどんこ病 －

うどん粉をまぶしたような白色のカビによる病害(写真1～8)です。長雨等の過湿や日照不足で軟弱徒長した株、過繁茂した株で多く発生します。うどんこ病が発病したつぼみでは、花弁がピンク色に変色することがあります(写真5)。

予防を主体とした防除対策を徹底しましょう！

- 1 育苗時からの防除を徹底し、本ぽに菌を持ち込まないようにする。
- 2 薬剤防除を行う際には、薬剤に展着剤を加え、葉裏にも薬液が良くかかるようにていねいに散布する。

《葉での病徴》



写真1 葉表



写真2 葉裏



写真3 果梗

《花・花柄・果実での病徴》



写真4
がくと果梗



写真5
花弁の変色



写真6 被害果(未熟)



写真7 被害果(成熟)

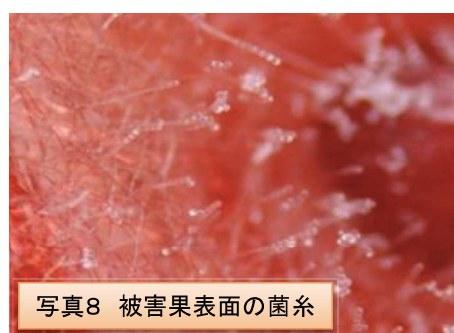


写真8 被害果表面の菌糸

詳細は、農業総合研究センター 防除課 (Tel 028-665-1244) までお問合せ下さい。

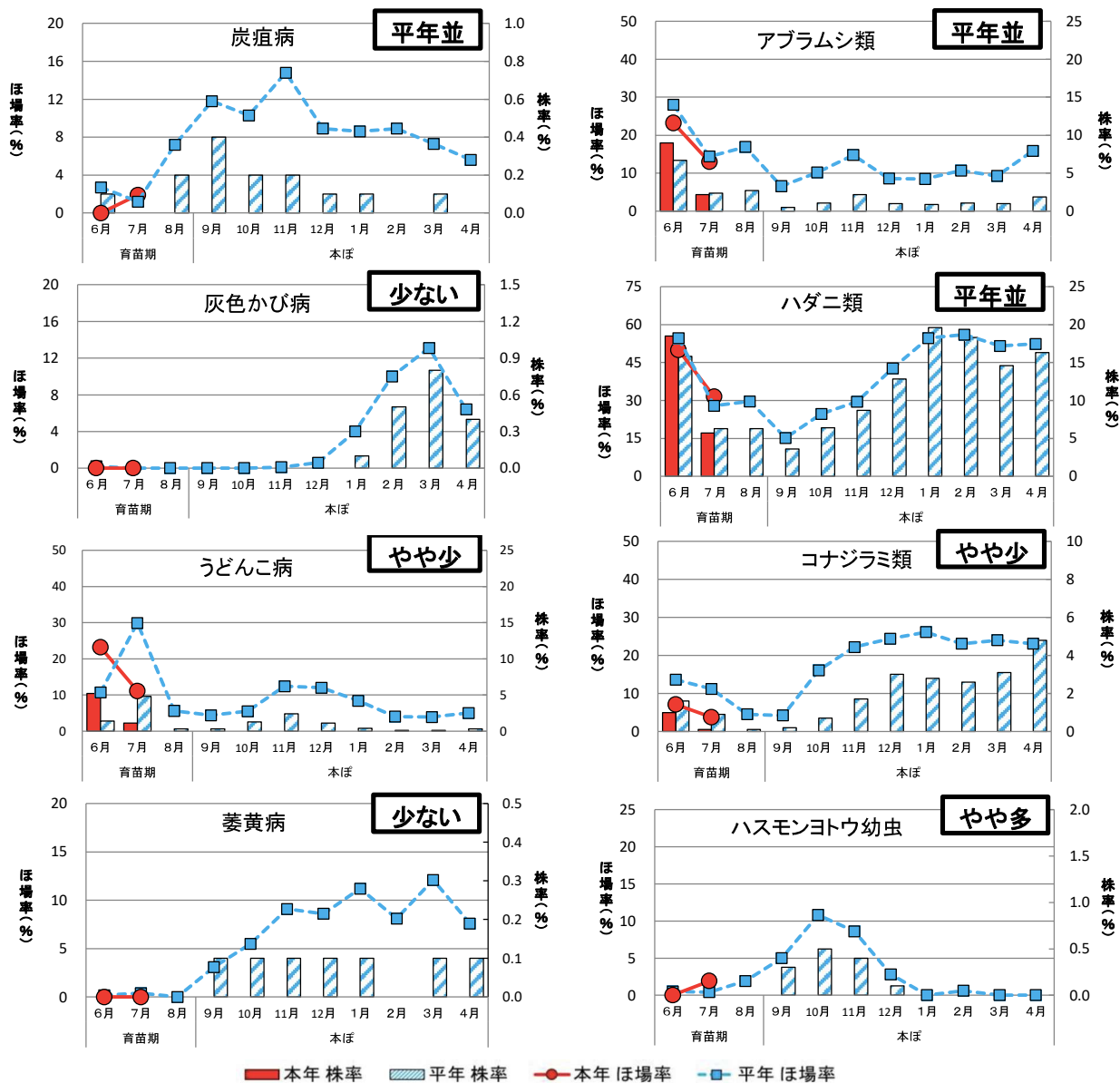
病害虫情報発表のお知らせは「[@tochigi_nousei](mailto:tochigi_nousei)」
農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)
でもご覧いただけます。



いちご病害虫情報第2号（7月）

令和7（2025）年7月18日
 栃木県農業総合研究センター
 環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：54 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

－ 育苗期のハダニ類防除 －

本ほでの発生量を抑えるためには、育苗期の防除を徹底し、ハダニ類を本ほへ持ち込まないことが重要です。

- 1 育苗期の薬剤散布には、トクチオン乳剤(RACコード I:1B、収穫75日前まで)やアグリメック(I:6、親株育成期、育苗期)等を使用する。
 ※本ほで天敵を導入する場合は、薬剤の天敵への影響日数に十分注意する。
- 2 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル(I:23)をかん注する。
- 3 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を活用するとともに、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 4 定植苗の高濃度炭酸ガス処理を適切に実施する。

■ 今月のトピックス イチゴ炭疽病

被害について

イチゴ炭疽病は、主に育苗期に高温多湿の条件下で発病が増加します。本病は苗不足や本ぽでの枯死株発生を引き起こすため、いちご栽培における重要病害です。

病徴は、葉では薄墨色の丸い斑点が発生します（写真1）。葉柄やランナーでは、黒色の陥没した病斑を生じ（写真2）、多湿時には病斑上に鮭肉色の孢子塊を形成します（写真3）。クラウンに感染した場合には、株が萎凋して枯死し、クラウン外部から内部に向かって褐変腐敗が進みます（写真4）。降雨や頭上かん水による水滴のはね上がりにより、感染株から孢子が飛散し、伝染します。

防除対策について

- 1 孢子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
- 2 予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 3 発病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理後に処分する。
- 4 発病株の周辺株は、潜在感染のおそれがあるため、定植苗として使用しない。また、感染拡大防止のための重点的な薬剤散布を行う。
- 5 定植前に本ぽの土壌消毒を行う。



写真1 薄墨色の丸い斑点(葉)



写真2 陥没した病斑(葉柄)



写真3 病斑上の鮭肉色の孢子塊

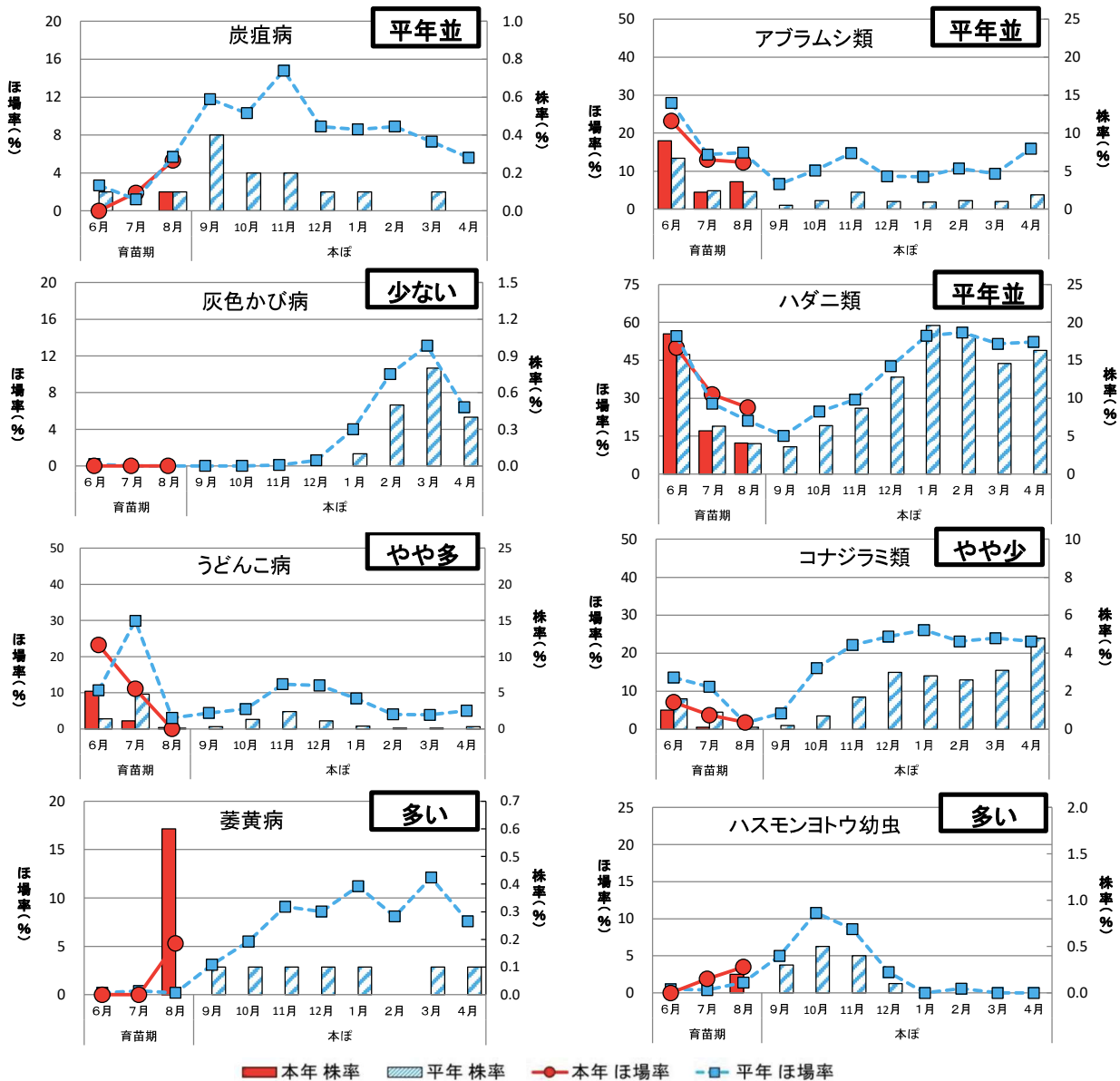


写真4 クラウン内部の褐変

詳細は、農業総合研究センター防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい
病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、
[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。



■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：57 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

一 炭疽病・萎黄病（定植前の防除）一

高温傾向が続いているため、高温性病害である炭疽病の防除に特段の注意をしましょう。また、萎黄病の発生が多く認められたため、発生状況をよく確認し、罹病株は適切に処分しましょう。

- 炭疽病では、胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水のはね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
- 炭疽病では、本ほへの罹病株の持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 炭疽病・萎黄病共に、発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。

■ 今月のトピックス ハスモンヨトウ

生態と被害について

ハスモンヨトウは、いちごの葉や果実を食害し被害を与えます。毛に覆われた卵塊（写真1）が葉裏に産み付けられ、孵化した幼虫は、若齢のうちには集団で葉を食害し（写真2）、不整形でカスリ状の食痕（写真3）をつくります。中・老齢（写真4）になると分散し隣接する株なども旺盛に食害します。昼間は地際や日陰にいることが多く、主に夜間に活動します。25℃のとき幼虫期間は14日程度で、土中での蛹を経て成虫になります。露地では越冬できませんが施設内では冬季も生存可能です。

防除対策について

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を行う。
- 2 成虫の侵入を阻止するため、施設の開口部や出入り口に防虫ネット（目合4mm）を展張する。
- 3 ほ場内をこまめに観察し早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプにも産卵するので注意する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

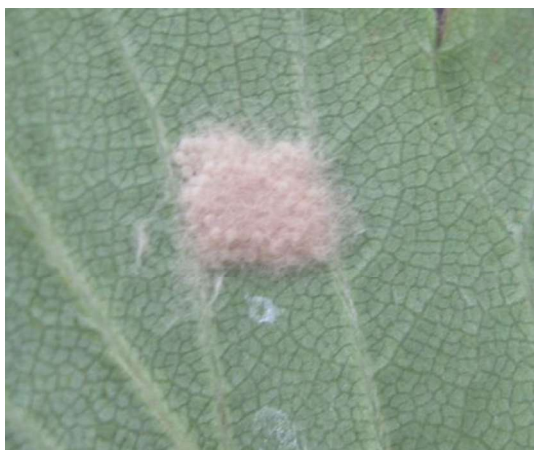


写真1 卵塊



写真2 若齢幼虫の集団



写真3 若齢幼虫による食痕



写真4 老齢幼虫

詳細は、農業総合研究センター防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、

[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。

